

木兆
太郎

本文

桃太郎

順調に仲間は増えつつあった。犬にキジ。後は――

「やあ、猿さん。団子あげるから仲間になってくれ。」

「は？」

「…え？」

「いや、こっちが呆気にとられたいね。」

「何――」

「いや、だから、おかしいじゃん。」

「？」

「犬いるじゃん。それっておかしくね？あんたさあ、『犬猿の仲』って言葉知らない？犬と猿は仲が――」

「いや、知らねえし。何『犬猿の仲』を知っているていで話しちゃってるの？習ってねえつつうの。聞いたこともねえよ。」

「何開き直ってるの？意味分からない。」

「お前さあ、個人的な感情に任せて子供の夢ぶち壊すのやめない？ほら、こうしている間に何人の子が泣いてると思う？」

「知らねー。」

「知らねー、じゃねえよ。」

「いやだから、そんな責任俺に被せないでくれる。俺、被害者。分かる？突っ掛かってきたのは君達。ね？」

「何で俺まで…？」

「うるせー、ホットドック！お前は所詮、吉備団子に釣られた負け犬だ！」

「…。」

「どうしたどうした！もう言葉に詰まったか！」

「せめてさあ。」

「なんだよ太郎。」

「協力しない？」

「は？」

「こうやってさあ、俺達のキャスティングが決まったのも何かの縁じゃん？だからさ――」

「とぼっちりだつつうの。」

「…コロス！」

「ワンワン！」

「やめな、ポチ、チュン介。」

「何、そんなあだ名つけてるの、ウケるー。」

「そうなんだよ、聞いてくれ、猿。太郎さ、キジには人間っぽい名前付けたのにさ、俺には『ポチ』だけ？」

「分かる分かる。人間ってそういうところ自己中心的だよな。」

「君達さあ。」

「なにさ。」

「『犬猿の仲』じゃないの？」

『それとこれとは別。』

「ほら、今だって口をそろえてさあ。息ピッタリじゃん。何なの？」

『それはその♂▲=◇…。』

「ほら、その言葉の詰まり様もピッタリじゃん。」

「犬、お前が合わせたんだぞ！」

「そっちこそ！」

「ああ、ああ。喧嘩はやめて。子供達が――」

「『犬猿の仲』を求めたのは誰だよ！！？」

「そうやってさあ、子供達のためにとか言って正義ぶるのは良くないよ？」

「チッ。うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「ならさあ、協力しようよ。」

「何にだよ？」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「よし。じゃあ早速。」

「だから、なにをするんだつつうの。」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「じゃあ惚けるの止めない？」

「マジで、話が飛びすぎて分からないよ！」

「だから、君が僕等の仲間に加わればいいの。」

「俺はどうゆう役なの？」

「知恵が働く仲間。」

「おお、素晴らしい。名参謀というわけか。」

「なあ、猿。聞いてくれよ。俺は『マヌケ』の設定だぜ。」

「なんでこう、生き物を下等扱いするかなア。」

「人間を家来にするっていうのは、人道的に問題だからとか。」

「そうだねえ、子供達が見てるもんね、も・も・た・ろ・う？」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「そうそう。黙って。」

「なんで、図に乗ってるの？俺、刀怖くねえし。」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「怖いんじゃない。」

「ああ、はいはい、分かりましたよ！怖いです！僕は刀が怖いです！鬼の金棒も怖いです。だからお供になれません。ばーい！」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「そういう設定なんだから仕方ないの！」

「…そうかア。」

「物分かり速いな。」

「だろ？」

「さて、じゃあいくよ。」

「おう！」

「やあ、猿さん。団子あげるから仲間になってくれ。」

「え、そこから？」

「は？」

「なんでそこからなの？」

「だって、さっきのが失敗だったから…。」

「そんなのあとで編集がやってくれるじゃん。」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「よし。じゃあ…やあ、猿さん。団子あげるから仲間になってくれ。」

「え、そこから？」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勘弁…。」

「やあ、猿さん。団子あげるから仲間になってくれ。」

「ちょっと待ってくれる？」

「何？」

「俺さあ、その言葉遣いが気に食わない。」

「は？」

「なっあってくれ、って、まだ主従関係でもないのに命令っておかしくない？」

「それは、設定——」

「出たー、人間の自己中心的な設定&そこににげるも・も・た・ろ——」

「うわあああああ！」

「嗚呼！刀は勸弁……」

「分かった、説明してやる。桃太郎は貧しい家庭で生まれたため——」

「産まれた？何処から？」

「うわあああああ！」

「嗚呼、それ気に病んでたんだね、ゴメン！」

「さて、そのため——」

「立ち直り早！」

「うるさい」

「はい」

「そのため、桃太郎は丁寧語とかを喋れないんだ。だから、『犬猿の仲』も知らないし——」

「なんでさあ。」

「は？」

「振り返すかなア、犬猿の仲に。」

「それは、具体的な例示のために。」

「忘れたいんだよおおおお！」

「嗚呼、それ気に病んでたんだね、ゴメン！」

「気をつけて」

「はい」

「じゃあ、いいよ、やろう、本番。」

「よし、じゃあ…やあ、猿さん。団子あげるから仲間になってくれ、って犬が全部食ってたあああああ！」

読んで下さったみなさまへ

この度は、私が書いた小説を読んでいただき、本当にありがとうございます!!!

早速ですが、みなさまにお願いがあります。よろしければ、本作品へのダメだし(?)を頂戴したいのです。というのは、私もまだ中学生なのでありまして、まだ文章力が身につけていないのです。こうやってあとがきを書いている、そのことばかりが気になります(苦笑)。

という次第です。お時間にゆとりがある方、どうかお願いします。

筆者

桃太郎

<http://p.booklog.jp/book/72685>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72685>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72685>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ